

# 『カーリカー・プラーナ』における カーマーキヤー縁起譚

宮 本 久 義

## I. はじめに

インド北東部に位置するアッサム州の都グワーハーティーに、多くのヒンドゥー教徒の巡礼者を集める霊山ニーラーチャラ (Nīlācala) がある。その中心にある聖地は、古代の王国の名であるカーマルーパ (Kāmarūpa、現在はカームループ県として名を残している) と呼ばれたり、中心寺院の御本尊であり寺院名でもあるカーマーキヤー (Kāmākhyā) と呼ばれている。カーマーキヤーはシヴァ神の妃の別名の一つである。シヴァ神には、サティー、パールヴァティー、ドゥルガー、カーリーなど多くの配偶者が存在するが、究極的には一人の妃がシヴァ神のとする行動の局面に従って、別々の役割を担って現れると理解されている。

カーマーキヤー女神に関連する神話は、シヴァ神の最初の妃サティーの話にさかのぼる。サティーは自分の父親ダクシャがシヴァ神を冷遇したので、焼身自殺を遂げる。それを知ったシヴァ神はダクシャの斎場 (儀礼の場) に行って破壊し、妻の体を担いで悲しみのあまり放浪する。すると世界が揺れ壊れそうになったので、人々がヴィシュヌ神に救済を頼む。シヴァ神が担いでいるサティーの体を、ヴィシュヌ神が円盤状の武器チャクラで切り刻むと、シヴァ神はようやく正気に戻る。サティーの体が多くの部分に分かれて地上に落ちた場所は 51 か所で、それらは「女神の座」(śaktipīṭha, śaktapīṭha) となった。シャクティは宇宙的根源力、エネルギーという意味の女性名詞で、女神や女性原理をも表す。シャクティはその派生語で、シャクティを信じる人々、またその宗派を指す。この派の人々は静的男性原理 (神) に対する動的な女性原理として、実際に世界展開を司る最高神はシャクティであると考えた。ヴェーダの男性中心の伝統の背後に常に存在していた女性崇拜の潮流がタントラの隆盛とともに表面に現れたものと考えられる。

カーマーキヤーはそれらの女神の座のうち、サティーの女性器 (yoni) が降下した場所として、他の聖地とは別格の扱いを受けている。カーマーキヤーを祀るこの聖地の縁起譚がまとまった形で記述されているのは『カーリカー・プラーナ』(Kālikāpurāna) で、10～11 世紀ころに編纂されたと考えられている<sup>1</sup>。本聖典には、サティーの神話、愛神カーマの神話、シヴァ神のダクシャの斎場破壊とサティーを掲げての放浪、ヴィシュヌ神の介錯

など、さまざまの神話が説かれるが、本稿では聖地カーマキヤーの縁起譚である第62章の和訳と註解をおこない、紙幅の関係でカーマキヤーの包括的な考察は後日に譲ることとする。

## II. *Kālikāpurāṇa* 第62章 *Kāmākhyāpūjātantra* の和訳と註解

bhagavān uvāca.

神（シヴァ）が言った。

kāmārtham āgatā yasmān mayā sārđhaṃ mahāgirau /

kāmākhyā procyate devī nīlakūṭe rahogatā //1//

女神は私と愛し合うために偉大な山岳であるニーラクータにやって来た。  
それゆえ〔彼女は〕カーマキヤーと呼ばれ、〔ここに〕密かに住んでいる。

kāmadā kāmīnī kāmā kāntā kāmāngadāyīnī /

kāmānganāśīnī yasmāt kāmākhyā tena cocyate //2 //

愛を与える者であり、愛を求める者であり、愛らしき女性であり、  
カーマの身体を与える者であり、カーマの身体を消滅させる者である<sup>ii</sup>。  
それゆえに、カーマキヤーと呼ばれる。

etasyāḥ śrṇu māhātmyaṃ kāmākhyāyā viśeṣataḥ /

yā sā prakṛtirūpeṇa jagatsarvaṃ niyojayet //3//

かの、創造力として全世界を造った人、  
そのカーマキヤーの威光（マーハートミヤ）を特別にお聞きなさい。

madhukaiṭabhanāśāya mahāmāyāvīmohitaḥ /

yadā śamyuyudhe viṣṇus tadaiśāmohayadd harim //4//

マドゥとカイトバの消滅（殺戮）のため、偉大なる幻力（マハーマーヤー）に魅入られて、  
ヴィシュヌが〔彼らと〕戦ったとき、彼を魅了したのは彼女であった<sup>iii</sup>。

dainandine tu pralaye prasupte garuḍadhvaje /

tasya śravaṇavidjātāv asurau madhukaiṭabhau //5//

一方、日々世界が還滅状態にあり、ヴィシュヌが眠っているあいだに、  
彼の耳に蓄積した垢から、二人のアスラ、マドゥとカイトバが生まれた<sup>iv</sup>。

kūrmaprṣṭhe sthitā devī viśīrṇevābhavaj jalaiḥ /

tām viśīrṇām yoganidrā mahāmāyā vyalokayat //6//

クールマ（亀）の背に居る〔大地の〕女神は水によって沈んでいるかのようであった。  
ヨーガニドラーであるマハーマーヤーは沈んでいるそれを見た。

tām vai dr̥ḍhatarām pṛthvīm kartuṃ prati tadeśvarī /

upāyaṃ cintayāmāsa katham pṛthvī bhaved dr̥ḍhā //7//

イーシュヴァリー（自在女神）はその時、かの大地をより堅固にするために、  
どうしたら大地が堅固になるかの方法を考えた。

idānīm ājyavat pṛthvī pravṛttā komalā jalaiḥ /

sr̥ṣṭikāle janān soḍhum katham śaktā bhaviṣyati //8//

「今、大地は水によってアージャ（凝乳）のように柔らかくなっている、  
世界創造時に〔柔らかい大地は〕 どうしたら人々を載せることができるようになるか。」

iti sañcintya sā māyā jagatām sr̥ṣṭirūpiṇī /

upagamya tadā viṣṇuṃ āsasāda sunidritam //9//

と熟考して、かの創造の姿〔そのもの〕であるマーヤーは、  
その時、熟睡しているヴィシュヌに近づき、〔そばに〕座った。

tam tu suptaṃ samāsādyā jagannātham jagatpatim /

vāmahastakaniṣṭhāgram tasya karṇe nyaveśayat //10//

かの熟睡している世界の主宰神であり世界の主人である〔ヴィシュヌ〕の  
そばに座って、〔彼女は〕左手の小指の先を、彼の耳に挿入した。

niveśya nakharāgreṇa proddhr̥ṭya śrāvaṇam malam /

cūrṇicakāra sā devī yoganidrā jagatprasūḥ //11//

世界の生みの親であるかのヨーガニドラー女神は、  
〔指を〕入れて爪の先で耳垢を取り出し、粉にした。

tatkaṇṇamalacūrṇebhyo madhur nāmāsuro 'bhavat /

tato dakṣiṇahastasya kaniṣṭhāgram tu dakṣiṇe //12//

karṇe nyaveśayat devī tasmād apy uddhr̥ṭam malam /

tac cāpi kṣodayāmāsa karaśākhādvayena tu //13//

彼の耳垢の粉からマドゥという名のアスラが生まれた。  
次に、女神は右手の小指の先を〔ヴィシュヌの〕右の  
耳に差し込んで、そこから取り出した垢をも  
両手の指で粉状にした。

tato 'bhūt kaiṭabho nāma balavān so 'suro mahān /  
utpannaḥ sa ca pānārthaṃ yasmān mrgitavān madhu //14//  
tatas tasya mahādevī madhunāmākarot tadā /

そこから、カイトバという名の力持ちで偉大なアスラが生まれた。  
そして、〔先に〕生まれた者は蜂蜜を飲みたがっていた。  
それゆえ、偉大な女神は彼にマドゥ（蜂蜜）と名を付けた。

utpannaḥ kīṭavad bhāti mahāmāyākare yataḥ //15//  
tato 'sya kaiṭabhaṃ nāma mahāmāyā tadākarot /  
tāv uvāca mahāmāyā yudhyatāṃ hariṇā saha //16//

〔もう一方は〕生まれると、マハーマーヤーの手の上で虫（キータ）のように見えた。  
それゆえ、マハーマーヤーは彼をカイトバ（虫似）と名付けた。  
マハーマーヤーは二人に、「ハリ（ヴィシュヌ）と戦え」と言った。

yuvāṃ no śraddhayevātra bhavantau nihaṇīṣyati /  
yuvāṃ yadā prabhāsete āvāṃ viṣṇuno vadhāna bho //17//  
'tadaivāyaṃ yuvāṃ hantā nānyathā harir apy atha /  
mahāmāyāmohitau tau viṣṇugātraṃ tadā gatau //18//

〔〔ヴィシュヌは〕信念によってかのように、ここではお前たちを殺さないであろう。  
お前たち二人が『ヴィシュヌよ、我々二人を殺せ』と言ったとき、  
その時のみ、ハリ（ヴィシュヌ）はお前たち二人を殺すが、それ以外は殺さないであろ  
う。  
〔そこで〕マハーマーヤーに魅せられた二人はヴィシュヌの身体に向かった。

bhramamāṇau dadṛṣatur nābhipadmotthitaṃ vidhim /  
tam ūcatus tau dhātāraṃ haniṣyāvo 'dya tvām iha //19//  
taṃ jāgaraya vaikunṭhaṃ yadi jīvitum icchasi /

〔身体の上を〕歩き回っていると、臍から生えた蓮の上にいる儀軌（ブラフマー）を見た。  
彼らは創造主に、「あなたを今ここで殺すであろう。もし生きていたければ、

かのヴァイクンタ（ヴィシュヌ）を起こせ」と言った。

tato brahmā mahāmāyāṃ yoganidrāṃ jagatprasūm //20//

prasādayāmāsa tadā stutibhir bahubhir bhayāt /

そこでブラフマーは恐れから、世界の生みの親であるヨーガニドラーであるマハーマーヤーをたくさんのお讃で機嫌をとった。

ciraṃ stutātha sā devī brahmaṇā jagadātmanā //21//

prasannā tarasā vyagram uvāca ca yathāvidhi /

さて、世界の魂（アートマン）であるブラフマーに長く賞賛されたかの女神は喜んで、規則に従って即座に興奮して返答した。

kim arthaṃ samstutā cāhaṃ kiṃ kariṣyāmy ahaṃ tava //22//

tad vada tvaṃ mahābhāga kariṣyāmy aham adya te /

「なぜ私が賞賛されるのですか。私はあなたに何をするのでしょうか。それをおっしゃって下さい、偉大な人よ。私が今あなたに何をするのかを。」

tatas tena mahāmāyā proktā dhātrā mahātmanā //23//

prabodhaya jagannāthaṃ yāvat tau<sup>v</sup> māṃ hariṣyataḥ /

sammohaya durādharṣāv asurau madhukaiṭabhau //24//

するとマハーマーヤーは、偉大な魂であるかの創造主に〔次のように〕言われた。「世界の主宰神（ヴィシュヌ）を目覚めさせよ、2人が私を殺す前に。混乱させよ、見えざるアスラたるマドゥとカイトバを。」

ity uktvā sā tadā devī brahmaṇā jagadātmanā /

bodhayāmāsa vaikuṇṭhaṃ mohayāmāsa tau tadā //25//

世界の魂たるブラフマーにそのように言われたので、かの女神は、ヴァイクンタ（ヴィシュヌ）を目覚めさせ、2人〔のアスラを〕を混乱させた。

tataḥ prabuddhaḥ kṛṣṇas tu dadarśa bhayaśālinam /

brahmāṇaṃ tau tadā ghorāv asurau madhukaiṭabhau //26//

そのあと、目覚めたクリシュナ（ヴィシュヌ）は恐怖に捉えられているブラフマーを見た。その時恐ろしいマドゥとカイトバの2人のアスラを〔も見た〕。

tatas tābhyām sa yuyudhe hy asurābhyām janārdanaḥ <sup>vi</sup>/

nāśakad dhārituṃ vīrāv asurau madhukaiṭabhau //27//

そこで、かのジャーナルダナ（ヴィシュヌ）は、2人のアスラと戦ったが、勇猛なアスラであるマドゥとカイトバを制圧できなかった。

ananto 'pi phaṇāgreṇa tān no dhartuṃ kṣamo 'bhavat /

yudhyamānān mahāvīrān vaikuṇṭham <sup>vii</sup> madhukaiṭabhān //28//

ヴァイクンタと偉大な勇者であるマドゥとカイトバが戦っているあいだ、アナンタ <sup>viii</sup> も鎌首の先端で彼らを支えたが、〔支えることが〕できなかった。

atha brahmā śilārūpām sthitisaktim tadākarot /

ardhajojanavistīrṇām ardhajojanamāyatām //29//

そこで、ブラフマーは半ヨージナの幅と半ヨージナの長さの岩の姿をした、〔大地を支える〕維持の力を造った。

tasyām śilāyām govindo yuyudhe nr̥pasattama /

saha tābhyām śilā sā tu praviveśa jalāntaram //30//

最高の王よ、その岩の上で、ゴーヴィンダ（ヴィシュヌ）は彼ら2人と戦った。しかし、その岩はといえば、水のなかへ沈んだ。

tasyām tu śaktyām magnāyām toyē sa yuyudhe hariḥ /

pañcavarṣasahasrāṇi bāhuyuddhair nirantaram //31//

その〔維持の〕力（岩）が水中に沈むと、かのハリ（ヴィシュヌ）は、5000年のあいだ間断なく腕力で戦った。

yadā vai nāśakad hantuṃ tau viṣṇur jagatām patih /

parām cintām tadāvāpa vidhātāpi bhayāt tataḥ //32//

世界の主ヴィシュヌが2人を殺戮できなかったので、創造主（ブラフマー）も恐れから、最高に憂慮した。

tatas tāv eva taṃ viṣṇum ūcatur baladarpitau /

punaḥ punar jaganmātrmahāmāyāvimohitau //33//

そこでかの力自慢で、世界の母たるマハーマーヤーに魅せられた二人はヴィシュヌに〔次のように〕繰り返し言った。

tuṣṭau svastvanniyuddhena varaṃ varaya mādharma /  
taveṣṭaṃ sampradāsyāvaḥ satyam etad bruvo 'dhunā //34//

「マーダヴァ（ヴィシュヌ）よ、〔貴方の〕我々との戦いに満足した。願い（ヴァラ）を選びなさい。今、貴方が望むものを本当に与えよう。」

tayos tadvacanaṃ śrutvā mādharma jagatām patiḥ /  
uvāca tau yuvāṃ vadhyau bhavatām me mahābalau //35//

iti dehi varaṃ mahyaṃ dātavyaṃ yadi vidyate /  
二人のその言葉を聞いて、世界の主マーダヴァ（ヴィシュヌ）は兩人に言った。  
「貴方がた2人はたいへん強力なので、私にとって殺されなければならない。  
それゆえ私に願いを与えよ。もしわかっているなら、与えられるべきである。」

tau tadā prāhatur nāśas tvatto nau śobhano 'dhunā //36//  
tatrāvāṃ jahi no yatra toyāṃ samprati vidyate /

tayos tadvacanaṃ śrutvā mādharma jagatām patiḥ //37//  
brahmāṇaṃ mām ca śīghreṇa prāhedam cātmasaṃjñayā /  
その時、兩人は言った、「我々にとって今あなたに殺されることは素晴らしいことだ。  
しかし、今現在水のないところで、われわれを殺してくれ。」  
世界の主マーダヴァ（ヴィシュヌ）は兩人の言葉を聞いて、  
すぐにブラフマーと私（シヴァ）に、自分の理解に基づいて次のことを言った。

brahmaśaktiśīlāṃ śīghram uddhṛtya dhriyatām yathā //38//  
tatra sthitvā mahāghorau haniṣyāmi mahābalau /  
toto brahmā hy ahaṃ caiva uddadhāra śīlāṃ tām //39//

「ブラフマシャクティという岩をすぐに持ち上げて支えて下さい。  
そこで立っている間に、私が非常に恐ろしく強力な兩人を殺します。」  
そこで、ブラフマーと私とはその岩を支えた。

tasyāṃ madhye pūrvabhāge hy ahaṃ parvatarūpadhrī /  
ūrdhve sthitvā śīlāṃ bhittvā praviveśa rasātalam //40//

その〔岩の〕上の東側の真ん中に、私は山の姿を取って、  
まっすぐに立ち、岩を割いて地下の世界に入った。

aiśānyām abhavat kūrmaḥ parvataś cāgrahīc chilām /  
 vāyavyām tathānanto nairṛtyām ca sureśvarī //41//  
 mahāmāyā jagaddhātrī śailarūpapradhāriṇī /  
 āgneyyām ca tathā viṣṇur ekarūpeṇa samsthitāḥ //42//  
 brahmaśaktiśīlām gṛṇṇan bhagavān parameśvaraḥ /  
 madhye brahmā tv ahaṃ caiva varāhaś ca tathāparaḥ //43//

山の姿をしたクールマ（ヴィシュヌの化身）が北東部にいて、岩を掴んだ。  
 同様に、北西部ではアナンタが、南西部では山の姿をし、  
 世界を支えるマハーマーヤー女神が、  
 そして南東部では同様に最高神ヴィシュヌが一人で  
 ブラフマシャクティシラーを掴んで支えていた。  
 そして中央では、ブラフマーと私と猪（ヴィシュヌの化身）が〔岩を支えていた〕。

tato varāhaprṣṭhasya carame jagatāmpatiḥ /  
 sthitvā śīlām avaṣṭabhya brahmaśaktim adhogatām //44//  
 vāmorujaghane yatnāt āropya śirasī tayoh<sup>ix</sup> /  
 jagadādhārabhūtaḥ sa sarvayatnena samyutaḥ //45//  
 sarvair balaiḥ samākramya viccheda ca pṛthak pṛthak /  
 madhukaitabhayoḥ samyag grīvayoḥ pṛthivīm ṛte //46//

そこで世界の主（ヴィシュヌ）はヴァラーハの背の頂点に立ち、  
 沈んでゆくブラフマシャクティの岩を支え、  
 〔さらに〕かの世界の基盤たる者（ヴィシュヌ）は左の腿と腰の上に、  
 努力して兩人の頭を一所懸命に載せていた。  
 そしてあらゆる力を込めて、マドゥとカイトバの首を完全に〔胴から〕  
 別々に切り離した。〔その結果〕大地（拠り所）がなくなった。

tasya cākramata sthemnā brahmaśaktir adhogatā /  
 dhriyamāṇāpi devaughair yatnād api muhurmuḥuḥ //47//  
 tatas tayos tu mṛtayoh śarīre jagatām patiḥ /  
 brahmaśaktim samuddhr̥tya nyadhāt tasyām prayatnataḥ //48//

彼（ヴィシュヌ）がずっとそこに立っていたので、ブラフマシャクティ〔の岩〕は、  
 すべての神々に努力して支えられていたのだが、次第に水中に沈み始めた。  
 そこで、世界の主はそのブラフマシャクティを持ち上げ、  
 その上に殺された2人の悪魔の身体を置いた。



uddhṛtāyāṃ pṛthivyāṃ tu tayor medovilepanaiḥ /

sudṛḡhām akarot pṛthivīm kleditām toyarāśibhiḥ //49//

大地が持ち上げられると、〔ヴィシュヌは〕 二人の脂肪を塗り込むことで、  
水分の堆積で湿っていた大地を堅固にした。

medovilepanād yasmād gīyate medinī ca sā /

adyāpi pṛthivī devī devarākṣasamānuṣaiḥ //50//

脂肪を塗られたことで、かの大地の女神は、現在でも、  
神々や悪魔や人間によって肥沃な女性（メーディニー）と呼ばれている。

atha kale bahutithe vyatīte prāṇisarjane /

agrḡṇām dakṣatanayāṃ bhāryārthe 'haṃ vadhūṃ varām //51//

さて、多くの日々が流れ去り、生類が生まれると、  
私はダクシャの娘で素晴らしい女性を妻として得た。

sā me 'bhūt preyaśī bhāryā prādāya samayaṃ pituḥ /

aniṣṭakārī tvam cet syāḥ prāṇāṃs tyakṣye tadā tv aham //52//

彼女は〔自分の〕父と〔次のような〕取り決め―「あなたが望ましくないことをしたら、  
私は命を捨てます」―をして、私の最愛の妻となった。

tato yajñe samastāṃs tu sa ca vav re carācaram /

na mām nāpi satīm vavre tadāniṣṭān mṛtā tu sā //53//

そのあと彼（ダクシャ）はすべての生類を供儀（ヤジュニヤ）に招いたが、  
私もサティーも招かなかった。これを望まれないことと考え、彼女は死んでしまった。

tato moḥaṃ samākrāntas tām ādāya mṛtām aham /

prātaḥ<sup>x</sup> pīṭhavarāṃ taṃ tu bhramamāṇa itastataḥ //54//

そこで、迷妄に取り付かれた私は亡くなった彼女を取って（肩に載せて）、  
あちこち歩きまわり、最高の座（聖地）に到達した。

tasyās tv aṅgāni paryāyāt patitāni yato yataḥ /

tat tat puṇyatamaṃ jātaṃ yoganidrāprabhāvataḥ //55//

彼女の肢体はあちらこちらに落ちたが、ヨーガニドラーの影響で

その（落下した場所の）どれもが最高に功德ある場所になった。

tasmims tu kubjikāpīthe satyās tad yonimaṇḍalam /

patitaṃ tatra sā devī mahāmāyā vyalīyata //56//

かのクブジカーの聖地に、サティのヨーニの部分落ち、  
そこに、かのマハーマーヤー女神は鎮座した。

līnāyām yoganidrāyām mayi parvatarūpiṇi (h) <sup>xi</sup> /

sa nīlavarnaḥ śailo 'bhūt patite yonimaṇḍale //57//

ヨーガニドラーは山の姿の私の中に依拠しているが、  
女性器が降下したので、それは青色の山となった。

sa tu śailo mahātūṅgaḥ pātālatalam āviśat /

tasyā ākramaṇād gāḍham hy antasthaṃ druhiṇo hy adhāt //58//

その高い山頂をした山は、彼女が入ってきたことで重くなり、  
ドゥルヒナ（ブラフマー）が下支えしたが、パーターラの底に沈みこんだ。

sa tu pūrvaṃ brahmaśaktiṃ śilāṃ dhartuṃ caturmukhaḥ /

śailarūpo 'bhavat tena śailarūpeṇa mām adhāt //59//

以前、4面の顔を持つ者（ブラフマー）はブラフマシャクティという岩を支えるため、  
岩山の姿となったが、〔今も〕その岩山の姿で私（シヴァ）を支えている。

brahmā parvatarūpī sa mayi parvatarūpiṇi /

sa śakto 'dho 'gamad gāḍham ākrānto māyayā vidheḥ //60//

山の姿をした私の中で、〔同じく〕山の姿となっているかの力強いブラフマーは、  
儀軌の幻力<sup>xii</sup>に強く圧迫され、重くなって下に降りてきた。

tato varāhaḥ saṃsakto mayi mām sa tu mādhaveḥ /

śailarūpaḥ śailarūpaṃ dhartuṃ samupacakrame //61//

そのあと、マードヴァであるヴァラーハが私の中で私に張り付いた。  
山の姿をした私は、山の姿〔の私自身〕を支えようとした。

so 'py adho 'yān mayā sārḍham tadā parvatarūpiṇī /

ākramya devīm pṛthivīm sthito bhuvī nikhānitaḥ //62//

山の姿をした彼（ヴァラーハ）もまた、私とともに沈み、  
〔そして〕大地の女神に侵入して、大地の上に留まった。

śataṃ śataṃ yojanānāṃ tuṅgam āsīd giritrayam /

tadākrāntaṃ mahādevyā sarvam eva hy adhogatam //63//

krośamātrasthitaṃ tuṅgaśeṣaṃ tat tritayasya tu /

3つの山の峰（高さ）は数百ヨージャナ<sup>xiii</sup>であった。

〔しかし〕偉大な女神に圧迫されて、すべて〔の山〕は下に沈んだ。

3つ〔の山〕の〔水面上に〕残された峰は1クローシャ<sup>xiv</sup>のみであった。

ekā samastajagatāṃ prakṛtiḥ sā yatas tataḥ //64//

brahmaviṣṇuśivair devair dhṛtā sā jagatāṃ prasūh /

彼女一人だけが全世界の根源（根本原質）であり、そこから

ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァに支えられて、彼女は世界の生みの母になった。

tatra pūrvo brahmaśailaḥ śveta ity ucyate suraiḥ //65//

それらの中で、前方のブラフマシャイラは、神々によって白〔い山〕と呼ばれている。

madrūpadhārī śailas tu nīla ity ucyate tathā /

sa tu madhyagataḥ pīṭhas trikoṇolūkhalākṛtiḥ //66//

vibhrājamānaḥ satataṃ madhye brahmavarāhayoḥ /

同じく、私の姿を取っている山は、青〔い山〕と呼ばれている。

それは真ん中に位置し、〔女神の〕座で、三角形で白の形をしている。

ブラフマー〔山〕とヴァラーハ〔山〕の間であって常に輝いている。

varāhaḥ śailarūpo yaḥ sa citra iti kathyate //67//

sarveṣāṃ saṃsthiṭaḥ paścād dīrghaḥ sarvebhya eva tu /

山の姿をしたヴァラーハは多色〔の山〕と言われている。

全ての〔山〕の後方に位置していて、どれよりも長い。

aiśānyāṃ yo 'bhavat kūrmaḥ śailarūpo mahādyutiḥ //68//

maṇikarṇaḥ sa nāmnā tu khyāto devaughsevitāḥ /

山の姿をしたクールマは北東にあって輝いていた。

それはマニカルナと呼ばれ、神々が多く棲むことで知られている。

yo `nantarūpaḥ śailas tu vāyavyāṃ samavasthitaḥ //69//

maṇiparvatasamjño `sau parvato mādhavapriyaḥ /

アナンタの姿をした山は北東に位置している。

それはマニパルヴァタと称する山で、マーダヴァに愛されている。

mahāmāyā girir yas tu nairṛtyāṃ samavasthitaḥ //70//

sa gandhamādano nāmnā sarvadā śaṅkarapriyaḥ /

マハーマーヤーの山は南西に位置している。

それはガンダマーダナと呼ばれ、常にシャンカラ（シヴァ）に愛されている。

varāhaprṣṭhacarama yataś chinnau mahāsurau //71//

hariṇā tatra saṃyātaḥ pāṇḍunātha iti smṛtaḥ /

ヴァラーハの背の頂上で、強大なアスラたち（マドゥとカイトバ）が

ハリによって〔首を〕切り落とされたので、そこはパンドゥナータとして知られている。

brahmaśaktiśilāyās tu pūrvabhḥāge tu madhyataḥ //72

yas tu parvatarūpo `haṃ sa tu bhasmācalāhvayaḥ<sup>xv</sup> /

山の姿をした私は、ブラフマシャクティシラーの東部の中心にあり、

バスマーチャラ（灰山）と呼ばれている。

evaṃ puṇyatame pīṭhe kubjikāpīṭhasamjñake //73//

nīlakūṭe mayā sārḍhaṃ devī rahasi saṃsthitā /

satyās tu patitaṃ tatra viśīrṇaṃ yonimaṇḍalam //74//

śilātvam agamac chaile kāmākhyā tatra saṃsthitā /

samspr̥ṣya tām śilāṃ martyo hy amaratvam avāpnuyāt //75

amartyo brahmasadanaṃ tatstho mokṣam avāpnuyāt /

このように、クブジカー<sup>xvi</sup>の座と名付けられた最も聖なる座である  
ニーラクータ（青峰）に、女神は私とともに密かに鎮座している。

そこには、サティーの女性器が落下して壊れ、

岩となって、山上にカーマーキヤーとして鎮座している。

人間でもその岩に触れたならば、不死性を得るであろう。

不死となってブラフマンの居処に住めば、解脱を得るであろう。

tasyāḥ śilāyā māhātmyaṃ yatra kāmeśvarī sthitā //76//

adbhutaṃ yasya guhye tu lohaṃ bhasma bhaved gatam /

カーメーシュヴァリーの鎮座するその岩の威光は驚異的で、  
その秘処（女性器）においては鉄も灰になってしまう。

sā cāpi pratyahaṃ tatra pañcamūrtidharābhavat //77//

mohārthaṃ sarvalokānāṃ mamāpi pṛītaye śivā /

ahaṃ pañcamukhenāśu pañcabhāge vyavasthitaḥ //78//

また、あらゆる人を混乱させるため、また私を喜ばせるために、  
かのシヴァー（マハーマーヤー）は、毎日そこで5つの姿を取った。  
私もすぐに5つの顔を持って5つの場所に鎮座した。

īśānaḥ pūrvabhāgasthaḥ kāmeśvaryāḥ pradhānataḥ /

aiśānyāṃ vai tatpuruṣo hy aghoras tasya sannidhau //79//

sadyojāto 'tha vāyavyāṃ vāmadevas tu saṅgataḥ /

東に居るのはイーシャーナである。カーメーシュヴァリーが〔その方角の〕主要〔な女神〕だからである。北東においてはタトプルシャで、彼のそばにはアゴーラが〔いる〕。  
またサディヨージャータが北西に〔居り〕、ヴァーマデーヴァが共にいる。

devyāś cāpi naraśreṣṭha pañcarūpāni bhairava //80//

śṛṇu vetāla guhyāni devair api sadaiva hi /

kāmākhya tripurā caiva tathā kāmeśvarī śivā //81//

śāradātha mahālokā kāmārūpaṅair yutā /

さらに、人々の最高の者バイラヴァよ、〔そして〕ヴェーターラよ、  
女神の5つの相を聞きなさい。〔それらは〕実に神々によっても常に隠されてきた<sup>xvii</sup>。  
カーマーカー、トリプラー、それにシヴァの妻としてのカーメーシュヴァリー、  
シャラダー、さらにマハーローカーで、〔皆〕カーマルーパの特質<sup>xviii</sup>を賦与されている。

mayi liṅgatvam āpanne śilāyāṃ yonimaṅdale //82//

sarve śilātvam agamac chailarūpās ca nirjarāḥ /

私がリング（男性器）の形〔の岩〕となり、〔サティーが〕岩の女性器になったので、  
すべての者（神々）が岩の形となり、山の姿で不壊（不死）〔となった〕。

yathāhaṃ nijarūpeṇa reme vai saha kāmāyā //83//

śīlārūpapratīcchannās tathā sarvās tu devatāḥ /

śīlārūpapratīcchannāḥ śaile śaile vyavasthitāḥ //84//

ramante ca svarūpeṇa nityaṃ rahasi saṅgatāḥ /

私が〔岩であっても〕本来の姿でカーマー（妻の別名）とともに  
愉しんでいるように、すべての神々も岩の姿に隠れて、〔愉しんでいた〕  
岩の姿に隠れた〔神々〕は、それぞれの山に鎮座し、  
そして本来の姿で常に密かに一緒になって愉しんでいた。

brahmā viṣṇur haraś cātra dikpālāḥ sarva eva te //85//

anye 'py atra sthitā devāḥ sānukūlāḥ sadā mayi /

upāsitaṃ tadā devīm kāmākhyāṃ kāmārūpiṇīm //86//

ブラフマー、ヴィシュヌとハラ（シヴァ）は、まさに皆方角神で、  
ここに居るほかの神々も、常に私に従っている、  
意のままに姿を変えられるカーマーキヤー女神を崇めるために。

nīlāśailas trikoṇas tu madhyanimnaḥ sadāśivaḥ /

tanmadhye maṇḍalaṃ cāru triṃśac chaktisamanvitam //87//

guhā manobhavā tatra manobhavavinirmītā /

ニーラシャイラは三角形で、〔その〕真ん中が低くなったところがサダーシヴァである。  
その真ん中に 30 のシャクティを伴った美しいマンダラがある。  
そこにはマノーバヴァ（カーマ神）によって造られたマノーバヴァーという洞窟がある。

yonis tasyāṃ śīlāyāṃ tu śīlārūpā manoharā /

vitastimātravistīrṇā ekaviṃśāṅgulīyutā //88//

kramasūkṣmavinamrā sā bhasmaśailānugāmīnī /

mahāmāyā jagaddhātṛī mūlabhūtā sanātānī //89//

sindūrakuṅkumāraktā sarvakāmapradāyīnī /

tasyāṃ yonau pañcarūpā nityaṃ krīḍati kāmīnī //90//

その岩には心を魅する岩の姿をしたヨーニがあり、

12 指の幅で、20 指の長さがある。

それはバスマシャイラ（灰の山）に向かって次第に狭く低くなっている。

マハーマーヤーは世界の維持者であり、永遠の根源的存在である。

スィンドウーラ（辰砂）ヤクンクマ（サフラン）で赤く色付けられ、すべての願いを叶え

る。

そのヨーニの中で、愛すべき5つの姿をして常に楽しんでいる。

tatrāṣṭau yoginīr nityā mūlabhūtāḥ sanātaniḥ /

pūrvoktāḥ śailaputryādyāḥ sthitā devyāḥ samantataḥ //91//

そこには以前に説いたシャイラプत्रीなど8人のヨーギニーが常に永遠の元の姿で女神を囲んでいる。

tāsāṃ tu pīṭhanāmāni śṛṇu caikatra bhairava /

guptakāmā ca śrīkāmā tathānyā vindhyavāsini //92//

koṭīśvarī vanasthā tu pādadurgā tathāparā /

dīrgheśvarī kramād eva prakatā bhuvaneśvarī //93//

おお、バイラヴァよ、彼女たちの座の名を一括して聞きなさい。

グプタカーマー、シュリーカーマー、同じくさらにヴィンディヤヴァースイニー、  
コーティーシュヴァリー、ヴァナスター、同じくさらにパーダドゥルガー、  
ディールゲーシュヴァリー、そしてまさに有名なブヴァネーシュヴァリー。

svayoginyāḥ pīṭhanāmnā khyātā aṣṭau ca devatāḥ /

sarvatīrthāni caikatra jalarūpāni bhairava //94//

sthitāni nāmnā saubhāgyasarasy alpāpi puṇyadā /

viṣṇus tu tire tasyās tu nāmnā kamala ity uta //95//

おおバイラヴァよ、8名の神格は女神自身の水の姿をしたヨーギニーで、

そして、すべての聖地はここに集まって〔それぞれの〕座の名で知られている。

サウバーギヤサラスという名の池の中に、小さいが功德を与えるものとして鎮座している。その〔池の〕岸にはカマラという名でヴィシュヌが〔鎮座している〕。

kāmukākhyas tu vaṭukaḥ<sup>xix</sup> kāmākhyābhyarṇasamsthitaḥ /

lakṣmīḥ sarasvatī devyau devyāḥ saṅge vyavasthite //96//

lalitākhyābhaval lakṣmīr mātaṅgī tu sarasvatī /

gaṇādhyakṣaḥ pūrvabhāge tasya śailasya samsthitaḥ //97//

siddhaḥ sa nāmnā vikhyātā dvāre devyāḥ priyaḥ sutaḥ /

カームカという名のヴァトゥカ（シヴァ）がカーマーキヤー〔女神〕のそばに鎮座している。

ラクシュミーとサラスヴァティーの両女神は、女神と共に鎮座している。

〔ここでは〕ラクシュミーはラリター、サラスヴァティーはマータンギーと呼ばれている。  
その山の東部にはガナーディヤクシャ（群れの長）<sup>xx</sup>が門に鎮座している。  
彼はスイッドグという名で、女神の愛する息子である。

kalpavṛkṣaḥ kalpavallī tintidī cāparājitā //98//

bhūtvā tasmin mahāsaile sthito devyā dhṛtaḥ priye /

カルパヴリクシャはタマリンド樹、カルパヴァッリーはアパラージター樹で、  
女神の愛するかの偉大な山にしっかりと鎮座している。

varāhaḥ pāṇḍunāthākhyāḥ sthitas tatra harir yataḥ //99//

jaghane śirasī kṛtvā jaghāna madhukaiṭabhau /

tasyāsanne brahmakuṇḍaṃ brahmaṇā nirmitaṃ purā //100//

ヴァラーハはパンドウナータの名でここに鎮座している。というのも  
ハリ（ヴィシュヌ）が腿の上でマドゥとカイトバの頭を切り落としたからである。  
そのそばには昔ブラフマーによって造られたブラフマクンダ（ブラフマー池）〔がある〕。

tśānākhyāḥ śivo yatra tat siddheśvarasaṃjñakam /

śilārūpaṃ siddhakuṇḍaṃ madhyasthaṃ vidhi bhairava<sup>xxi</sup> //101//

イーシャーナという名の頭がそこにあり、スイッデーシュヴァラと名付けられている。  
バイラヴァよ、岩の姿のスイッドグクンダ（成就の池）が〔その〕真ん中にあるのを知りな  
さい。

tasyāsanne gayākṣetraṃ kṣetraṃ vārāṇasī tathā /

yonimaṇḍalasaṃkāśaṃ kuṇḍaṃ bhūtvā vyavasthitam //102//

そのそばにはガヤーの聖地とヴァーラーナスィー〔の聖地〕がある。  
ヨーニマンダラ（女性器）に似た姿で、池となって鎮座している。

tatraivāmṛtakuṇḍaṃ tu sudhāsaṅghaprapūritam /

mama priyārtham indreṇa sthāpitaṃ saha nirjaraiḥ //103//

まさに同じ所に甘美な飲料に満ちたアムリタクンダ（不死の池）がある。  
〔それは〕私の愛する人のためにインドラと多くの神々によって造られたものである。

vāmadevāhvayaṃ śīrṣaṃ śrīkāmeśvarasaṃjñakam /

kāmakuṇḍaṃ mahāpuṇyaṃ tasyāsanne vyavasthitam //104//



ヴァーマデーヴァという名の〔シヴァの〕頭部は、〔ここでは〕吉祥なるカーメーシュヴァラと名付けられている。そのそばに偉大な功德のあるカーマクンダ（愛の池）がある。

kedārasamjñakam kṣetraṃ madhyasthaṃ siddhakāmayoḥ /

dīrghaṃ cuturdaśavyāmacchāyāyāc chatrāhvayaṃ tu tat //105//

ケーダーラと名付けられる聖地はスイツダ〔池〕とカーマ〔池〕の真ん中にある。

14 尋<sup>xxii</sup>の長さで、チャーヤーチャトラ<sup>xxiii</sup>と名付けられている。

tasyāsanne śailaputrī guptakāmāhvayā tu sā /

guptakuṇḍasya madhyasthā kāmēśagrāvaṇi saṅgatā //106//

kāmēśvaraśilāsaktā kāmākhyāsamjñitā sadā /

pūrvabhāgeṇa śamsaktā yoneḥ tu paramārgataḥ //107//

そのそばにシャイラプत्रीがあり、それはグプタカーマと呼ばれており、グプタクンダの真ん中にあり、カーメーシャの石と共にある。

〔彼女は〕カーメーシュヴァラの岩と接しており、常にカーマキヤーと呼ばれている。

東部で〔カーメーシュヴァラの岩と〕接しており、ヨーニは他の部分と〔接している〕<sup>xxiv</sup>。

kāmākāmākhyayor madhye kālarātrir vyavasthitā /

pīṭhe dīrghēśvarī<sup>xxv</sup> nāmnā sīmābhāge pracandikā //108//

カーメーシュヴァラとカーマキヤーの間にカーララートリが、〔この〕座では恐ろしいディールゲーシュヴァリーという名で境界部に鎮座している。

kāmākhyāprastaraprānte kūśmāṇḍī nāma yoginī /

pīṭhe koṭīśvarī nāmnā yonirūpeṇa samsthitā //109//

カーマキヤーの岩の端にはクーシュマーンディーというヨーギニーがおり、〔この〕座ではコーティーシュヴァリーというヨーニの姿で鎮座している。

yac cāghorāhvayaṃ śīrṣaṃ tat kāmāyās tu dakṣiṇe /

pīṭhe bhairavanāmā tu gadīte paramārthibhiḥ //110//

アゴーラと呼ばれる〔シヴァの〕頭部はカーマ〔キヤー〕の東にあり、

〔この〕座ではバイラヴァの名で、最高の目的を求める者たちによって崇められている。

cāmuṇḍā bhairavī nāmnā bhairavāsannasamsthitā /

nāyikā kāmādā bhavateś caṇḍamuṇḍavināśinī //111//

バイラヴィーという名のチャームンダーが、バイラヴァのそばに居る。

バイラヴァの配偶者で、信奉者の願いを叶える者であり、チャンダとムンダ<sup>xxvi</sup>の殺戮者である。

kāmābhairavayor madhye svayaṃ devī surāpagā /

hitāya sarvajagatām devyās tu prītaye sadā //112//

カーマーとバイラヴァの間には、全ての世界の福祉のために

ガンガー女神ご自身がおり、常に〔カーマーキヤー〕女神を喜ばせている。

sadyojātāhvayaṃ śrīṣaṃ pīṭhe tv āmrātakesvaram /

bhairavākhye gahvare tu sthitam devarṣisevitam //113//

サディヨージャータと呼ばれる〔私の〕頭部は、〔この〕座ではアームラータ

ケーシュヴァラ〔と呼ばれ〕、バイラヴァという名の洞窟で神仙<sup>xxvii</sup>たちに崇められている。

viddhi tatraiva durgākhyām nāyikām yonirūpiṇīm /

siddhakāmeśvarī nāmnā khyātā deveṣu nityaśaḥ //114//

まさにここでヨーニの姿をしたドゥルガーと呼ばれる〔私の〕配偶者を知りなさい。

スイッダカーメーシュヴァリーという名で常に神々の間で知られている。

ajīrṇapatraḥ succhāyo vṛkṣas tatra susaṃsthitah /

āmrātakah kalpavṛkṣaḥ kalpavallīsamānvitah //115//

そこには葉が枯れず心地よい木陰を〔作る〕樹木がある。

〔それは〕願いを叶える樹アームラータカで、願いを叶えるツタを伴っている。

pīṭhe tu siddhagaṅgākhyā svayaṃ gaṅgā samutthitā /

āmrātakasya nikaṭe mama prītivivṛddhaye //116//

〔この〕座の中のアームラータカのそばには、スイッダガンガーと呼ばれる

ガンガー自身が湧き出し、私に喜びを増してくれている。

puṣkarākhyam tatṣetraṃ pīṭhe tv āmrātakāhvayam /

aiśānyām tatpuruṣākhyam mama śrīṣaṃ vyavasthitam //117//

bhuvaneśvaranāmnā tu pīṭhe khyātam ca bhairava /

gahvaram bhuvaneśasya bhuvanānandasamjñakam //118//

ブシュカラと呼ばれるかの聖地もあり、〔この〕座では、アームラータカと呼ばれている。北東部にはタトプルシャと呼ばれる私の頭部があり、ブヴァネーシュヴァラという名で知られている、バイラヴァよ。ブヴァネーシュヴァラの洞窟はブヴァネーシュヴァラーナンダと名付けられている。

tasyāsanne tu surabhiḥ śilārūpeṇa samsthitā /

kāmadhenur iti khyātā pīṭhe kāmapradāyinī //119//

そのそばには岩の形をした〔雄牛の〕スラビが鎮座していて、

〔この〕座では、〔あらゆる〕願いを叶えるカーマデーヌとして知られている。

yo 'sau śarabhamūrtir me madhyakhaṇḍapracāṇḍakaḥ /

mahābhairavanāmābhūt koṭilingāhvayas tu saḥ //120//

マハーバイラヴァとう名のシャラバ<sup>xxviii</sup>の形をした私の〔体の〕恐ろしい中間部分は〔この座では〕コーティリングと呼ばれている。

mūrtibhiḥ pañcabhiḥ pañcabhāgeṣu samavasthitāḥ /

ahaṃ paścād atiprītyā bhairavākhyāḥ sthito dhare //121//

5つの形をして5つの場所に鎮座している私は、

深い愛着ゆえ、とうとう〔この〕山で、バイラヴァとして住むようになった。

mahāgaurī tu yā devī yoginī siddharūpiṇī /

sā brahmaparvate cāste śilārūpeṇa cordhvataḥ //122//

atīvarūpasampannā nāmnā sā bhuvaneśvarī /

yatra brahmā tu saṃsakto mayi parvatarūpiṇī //123//

kalpavallī tu tatrāste nāmnā sā tv aparājitā /

kāmadhenur adūrasthā pūrvabhāge maheśvarī //124//

マハーガウリーは、スイツダ（成就者）の姿をしたヨーギニーで、

彼女は岩の姿でブラフマパルヴァタの上方に居る。

美しい容姿を持った彼女はブヴァネーシュヴァリーの名を持つ。

そこには山の姿をした私の中にブラフマーが合体している。

アパラジターという名の願いを叶えるツタがあり、

遠くない所にカーマデーヌがいて、東部にはマヘーシュヴァリーが〔居る〕。

śrīkāmākhyā yonirūpā caṇḍikā sā tu yoginī /

āgneyyāṃ vidhi tāṃ saṃsthāṃ sarvakāmapradāṃ śubhāṃ //125//

ヨーギニーのチャンディカーは、ヨーニの姿をした聖なるカーマーキヤーである。  
南東に住み、美しく、あらゆる願いを叶える者として〔彼女を〕知りなさい。

yoginī caṇḍaghaṇṭākhyā pīṭhe 'bhūd vindhyavāsini /

yoginī skandamātā tatpīṭhe 'bhūd vanavāsini //126//

チャンドガントー（チャンドラガントー？）<sup>xxix</sup> と呼ばれるヨーギニーは、〔この〕座では  
ヴィンディヤヴァースィニーである。<sup>xxx</sup>

スカンダマター〔と呼ばれる〕ヨーギニーは、この座ではヴァナヴァースィニーである。

kātyāyanī pīṭhanāmnā pādaturgeti gadyate /

nairṛtyāṃ nīśāśailasya prānte sā saṃsthitā śivā //127//

カートヤヤニーは〔この〕座での名はパーダドゥルガーと唱えられる。  
ニーラシャイラの南西の端にシヴァーとして鎮座している。

yo 'sau nandī mama tanuḥ sat u pāśāṇarūpadhr̥k /

saṃsthitāḥ paścimadvāri hanumān pīṭhanāmataḥ //128//

私の身体であるナンディンは石の姿をとり、  
〔この〕座ではハヌマーンとして西門に鎮座している。

aurvva uvāca

アウルヴァ<sup>xxxi</sup> が言った。

iti tasya vacaḥ śrutvā śambhor amitatejaśaḥ /

bhairavas taṃ tu papraccha vetālo 'pi samutsukaḥ //129//

以上のように、無限の威力あるシャンプ（シヴァ）の言葉を聞いて、  
バイラヴァは、また熱意あるヴェーターラも、彼に質問した。

vetālabhairavāv ūcatuḥ

ヴェーターラとバイラヴァは言った。

śrutaḥ pīṭhakramas tata devyāḥ pūjākramas tathā /

śrotum icchāmi mūrtīnāṃ pañcānāṃ api śaṅkara //130//

rūpāṇi pañcamūrtīnām mantrāṇi ca samantataḥ /

tatra mantrāṇi tantrāṇi vada nau vṛṣabhadhvaja //131//

〔この〕座の次第（概観）とまた女神の次第（儀軌手順）をお聞きしましたので、

〔女神の〕5つの像についてもお聞きしたい、シャンカラ（シヴァ）よ。

5つの像の姿と、〔それに関する〕マントラをすべて〔お聞きしたい〕。

さあ私たちにマントラとタントラを語って下さい、ヴリシャバドヴァジャ（雄牛の旗を持つ者）よ。

īśvara uvāca

神（シヴァ）が言った。

śṛṇu vakṣyāmi vetāla mantram tantram pṛtak pṛtak /

kāmākhyāpañcamūrtīnām rūpaṃ kalpaṃ ca bhairava //132//

聞きなさい、ヴェーターラよ、パイラヴァよ。マントラとタントラについて、

カーマーカーの5つの像について、姿と儀軌を別々に語ろう。

kāmasthaṃ kāmamadyasthaṃ kāmadevapuṭīkr̥tam /

kāmena kāmayet kāmo kāmam kāme niyojayet //133//

愛があり、愛の中心にあり、愛の神（カーマデーヴァ）に包まれたものを

愛によって愛すべきである。愛は愛を愛に繋げるべきである。

jyeṣṭhaṃ tu vyañjanaṃ brahman paraḥ śāntaṃ tad ucyate /

prathaṃ kramataḥ kuryāt tat saṃsaktaṃ sudhāmayam //134//

ブラフマンの至高の表れ〔である聖音オーム〕は最高の寂靜と言われる。

その不死と関係するそれ（聖音）を次第の最初に唱えるべきである。

prajāpatis tathā śakrabījaṃ saṃsthādisaṃyutam /

candrārddhasahitaṃ bījaṃ kāmākhyāyāḥ pracakṣyate //135//

ブラジャーパティとインドラの種子と、〔すべての音の〕初めと終わりも具え、

カーマーカーの種子である半月形も見られる<sup>xxxii</sup>。

idaṃ dharmapradam kāmamokṣārthānām pradāyakam /

idaṃ rahasyam paramam anyatra tu sudurlabham //136//

これ（聖音）はダルマを授け、カーマ、モークシャ、アルタ<sup>xxxiii</sup>を授けるものである。

これは最高の秘密で、他のいかなる所でも得ることは難しい。

śrotreṇodyamya śṛṇuyād guruvaktrān narottamaḥ /

sa kāmān akhilān prāpya śivaloke mahīyate //137//

最高の人間が耳をそばだてて師の口から〔聖音を〕聞けば、  
彼はあらゆる願いを手に入れ、シヴァの世界<sup>xxxiv</sup>で幸せになる。

śrutisakalitasāraṃ devakaṅṭhaughahāraṃ

sakalakaluṣahāri śrīdharānandakāri /

sunayaśubhagagobhir bhrājayed yad yaśobhis

tad iha śivasamastaṃ vighnanantrīṅgitārtham //138//

〔ヴェーターラとバイラヴァよ、カーマーキヤーの性質を聞きなさい。〕

天啓聖典に蓄積された精髓であり、神の喉の暴流を除去し、  
あらゆる不浄の除去者であり、吉祥をもたらし、喜ばせる者である。  
この世のあらゆる吉祥をもたらす者は、障碍を破壊する目的のために、  
〔信奉者を〕よき智慧と幸運と牛と名声により、輝かすであろう<sup>xxxv</sup>。

nayanakarabhakāri dhyānināṃ copakāri

praṇayisunayasamsthāṃ devasatyāhnikastham /

paramapadaviśīrṇaṃ sarvadaurbhāgyajīrṇaṃ

śṛṇu śivapadarūpaṃ kāmadevyāḥ svarūpaṃ //139//

シヴァの境地の姿をしたカーマデーヴィーの本性を聞きなさい。  
眼を喜ばす(?)者であり、専心する者を助ける者であり、  
愛する者の良き振る舞いの中にあり、神々の真理と日課(日々の儀礼)にあり、  
最高の境地が破壊され(?)、すべての不運が消え去る。

śravaṇagaganamātrā cārditaṃ yasya nāma

prabhavati bahubhūtyai nītimārgaikadhāma /

suragaṇagaṇanāyāṃ kuṇḍalī yasya śaktis

tad iha paramarūpaṃ cintanīyaṃ hatāsaiḥ //140//

その名が耳の空洞に入るだけで、破壊力があり、  
善き道を行くことを守る者には繁栄をもたらし、  
神々を数える時には、クンダリニーの力として表れ、  
この世で希望を失った者たちによってその至高の姿が思慕される。

raviśaśiyutakarṇā kumkumāpītavarṇā  
maṇikanakavicitrā lolakarṇā trinetrā /  
abhayavaradahastā sākṣasūtrapraśastā  
pranatasuranareśā siddhakāmeśvarī sā //141//

かのスイツダカーメーシュヴァリーは、太陽と月の耳飾りを付け、  
サフランのような黄色い色をし、宝石と黄金で輝き、揺れる耳で、三眼を持ち、  
恐怖を取り除き願いを与える手〔の形〕<sup>xxxvi</sup>をし、ルドラークシャの実で  
造られた数珠<sup>xxxvii</sup>を持つ秀でた姿で、神々と王族に礼拝される女神である。

aruṇakamalaśamsthā raktapadmāsanasthā  
navataruṇaśarīrā muktakeśī suhārā /  
śavahr̥ḍi pṛṭhutumgastanyayugmā manojñā  
śiśuravisamavastrā sarvakāmeśvarī sā //142//

かのサルヴァカーメーシュヴァリーは、紅蓮の姿で、赤い蓮華座をとり、  
新鮮で若い身体を持ち、ほどけた髪で、美しいネックレスをし、  
屍体の胸の上に居て、豊満で突き出た両の乳房を持ち、魅力的で、  
生まれたばかりの太陽のような衣裳をまとっている。

vipulavibhavadātrī smeravaktrā sukeśī  
lalitanakharadantā sāmīcandrāvanamrā /  
manasījadṛṣṭadisthā yonimudrālasantī  
pavanagamaśaktā śaṃśrutasthānabhāgā //143//

〔彼女は〕多くの幸福を与える者であり、微笑する顔と美しい髪を持ち、  
なめらかな爪と歯を持ち、〔額に〕三日月を持ち、前傾する姿勢で、  
心眼を具え、ヨーニの姿の岩に宿り、風のように進むことができ、  
〔他の〕有名な聖地の〔集まる〕場〔となっている〕。

cintyā caivaṃ vidyudagniprakāśā  
dharmārthādyam sādhakair vāñchitārthaiḥ /  
kalpyantu trīṇy aryatadam samyag aryam  
vetāla tvam bhairava śrīpratiṣṭham //144//

ダルマやアルタなどを目的として求める行者（信奉者）により、  
〔彼女は〕まさに稲妻の火の輝きとして念想されるべきである。

お前、ヴェーターラとバイラヴァよ、3つの（不明）と、完全な（不明）を、  
吉祥をもたらすものとして考えよ（？）<sup>xxxviii</sup>。

tasminn ardhmaṃ maṅḍalaṃ yaddhi paścāt

kāryaṃ caitac candanaīḥ puṣpayuktaiḥ /

paryāyo yo lekhane pūrvam ukto

devītantra so 'tra pūrvam vidheyāḥ //145//

ここにおいて、このあとに続く半分のマンダラは、

白檀で描かれ花で飾られるべし。

描き方についての順序は、『デーヴィータントラ』で以前に説かれたが、

ここでもまず初めに従われるべきである<sup>xxxix</sup>。

iti śrīkālīkāpurāṇe kāmākhyāpūjātante dviṣaṣṭitamo 'dhyāyāḥ //62//

以上、吉祥なる『カーリカー・ブラーナ』におけるカーマーキヤー〔女神〕の礼拝儀軌、  
第62章。

#### 【テキスト】

底本：Shastri, B. N. (ed.), 1991, *The Kālīkāpurāṇa (Text, Introduction and Translation in English)*. Part II, Reprint: Delhi: Nag Publishers.

B本：Śāstrī, B. N. (ed.), 1972, *Kālīkāpurāṇam*. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office.

（【Rocher：179】に記されている書誌について簡単に触れておくと、Kālīkāpurāṇaは1891年にボンベイで出版されたあと、1910年にベンガル語訳が付せられたものがカルカッタで出版された。さらに、1972年にB. N. Śāstrī編のものがヴァーラーナシーで出版された（とりあえずこれをB本とした）。今回筆者が底本としたのは英訳の付いた3巻本であるが、編者がB本と同じB. N. Shastriであるにもかかわらず、多くの箇所が違う読みが採用されている。この2本がどのような関係にあるのか筆者には不明である。）

#### 【参考文献】

Hazra, R.C., 1975, *Studies in the Purāṇic Records on Hindu Rites and Customs*. Dakka University, 1940, Reprint: Delhi-Patna-Varanasi: Motilal Banarsidass, 2nd ed.

Mani, Vettam, 1975, *Purāṇic Encyclopaedia*. Delhi-Patna-Varanasi: Motilal Banarsidass.

Mishra, Nihar Ranjan, 2004. *Kamakhyā – A Socio-Cultural Study*. New Delhi: D.K. Printworld (P) Ltd.

Padoux, André, and Roger-Orphé Jeanty (transl.), 2013, *The Heart of the Yoginī : The Yoginīhr̥daya, a Sanskrit Tantric Treatise*. New York: Oxford University Press.

Rocher, Ludo, 1986, *The Purāṇas*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Singh, Ravi S., 2011, 'The Kamakhyā Devi Temple: Symbolism, Sacredscapes and Festivities', in, Singh, Rana P.B. (ed.) *Holy Places and Pilgrimages: Essays on India*. Planet Earth & Cultural Understanding Series, Pub. 8. New Delhi: Shubhi Publications, pp 81-104. <chapter 3>.

Sircar, Dineschandra, 1998, *The Śākta Pīṭhas*. Delhi-Patna-Varanasi: Motilal Banarsidass.

Moniel-Williams, Moniel, 1899, *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford: Clarendon Press.



古賀勝郎・高橋明(編)、2006、『ヒンディー語 = 日本語辞典』大修館書店

菅沼晃(編)、1985、『インド神話伝説辞典』東京堂出版

杉木恒彦、2014、「アッサムの愛の女神の大祭—2013年アンブヴァーチー祭調査報告—」『日本橋学館大学紀要』第13号

横地優子(訳注)、2000、「デーヴィー・マーハートミヤ」、小倉泰・横地優子訳注、『ヒンドゥー教の聖典二編—ギーターゴヴィンダ、デーヴィー・マーハートミヤ』平凡社、所収

<sup>i</sup> 【Rocher : 182】 参照。

<sup>ii</sup> ここに説かれる「カーマ」は、苦行に励んでいるシヴァ神にパールヴァティーとの結婚を促すためにキュービッドの役目をしたカーマ神のこと。シヴァ神の三眼から放たれた眼光でカーマはいったん灰になるが、カーマの妻ラティヤパールヴァティーに懲罰され、シヴァはカーマを元の状態に戻す。シヴァの神妃はカーマの死と復活に深く関与している。

<sup>iii</sup> 8世紀ころに成立したと考えられている『デーヴィー・マーハートミヤ』の第1章で悪魔マドゥとカイトバの殺戮が語られる【横地 : 135-145】。マハーマーヤー女神の特徴については【横地 : 245-246】 参照。

<sup>iv</sup> マドゥとカイトバがヴィシュヌの耳垢から生まれたことについては、【横地 : 142】。

<sup>v</sup> 底本の本文は yāvatro で、脚注には yāvatrau とし異読も記されているが (p. 908)、いずれも意味不明。ここでは Text B の本文 yāvāt tau (p. 450) を採用した。

<sup>vi</sup> 底本は janārdana (呼格) となっているが、主格の janārdanaḥ とする B 本の読みを採用した。

<sup>vii</sup> 底本の vaikunṭha を B 本に従って vaikunṭham とした。

<sup>viii</sup> ヴィシュヌが横たわる時に寝台のようにになっている大蛇の名。

<sup>ix</sup> 底本の tayo を B 本に従って tayoh とした。

<sup>x</sup> 底本も B 本も異読として prāptaḥ を載せている。

<sup>xi</sup> 底本は parvatarūpiniḥ、B 本は parvatarūpini となっているが、どちらもコンテキストにそぐわないので、parvatarūpini とした。

<sup>xii</sup> 原文 māyāyā vidheḥ の「vidhi の māyā によって」が、具体的に何を意味するか不明。英訳でも、'by Māyā of Vidhi (of destiny?)' となっており、意味が明瞭ではない。(p. 913)

<sup>xiii</sup> ヨージャナは長さの単位で、【Moniel-Williams : 858】によれば、約9マイルのほかに諸説がしょうかいされている。

<sup>xiv</sup> クローシャは長さの単位で、四分の一ヨージャナ【Moniel-Williams : 322】。

<sup>xv</sup> 底本、B 本ともに 'bhasmacala-' となっているが、灰 (bhasma) の山 (acala) の意と考えらるので、'bhasmācala-' と修正した。

<sup>xvi</sup> Kubjikā については詳細不明。【Mani : 437】には、Kubjā の項目があり、マーガ月の沐浴を続けた結果解脱したこと、悪魔 Sunda と Upasunda が世界に恐怖を与えていた時、Kubjā が Tilottamā に化身して誘惑した結果、両悪魔が互いに殺し合ったこと、ブラフマーがそれを愛でて、Sūryaloka に彼女のための座をもうけたことが記載されている。Kubjā (Kubjikā と同義) もマハーマーヤーも2人の悪魔を成敗した点が共通するので、Kubjikā がマハーマーヤーの別名の一つになったのであろう。

<sup>xvii</sup> 'guhyaṇi devair api sadaiva' は英訳では 'for-ever even secret to gods' (p. 916) (神々にとっても秘密) となっているが誤訳であろう。

<sup>xviii</sup> 「カーマルーパの特質」とは、意のままに姿を変えられること。英訳 'the quality of assuming shape at will' (p. 916)

<sup>xix</sup> vaṭuka の vaṭu は baṭu と書かれ、少年、あるいはシャークタ派ではシヴァ神のことを指す。baṭuka は少年、あるいはシヴァ神の別名【Monier-Williams : 719; 914】

<sup>xx</sup> gaṇādhyakṣa は群れの長の意。ガネーシャの名で良く知られている神。

<sup>xxi</sup> この詩節のテキストは英訳者の脚注によればだいぶ乱れているようで、英訳者は śiraḥ (m.) を śiraḥ (n.) とするベンガル語訳に従って「頭 (head)」としている。しかしそれでも、īśānākhyāḥ (m.) との整合性が取れない。後半部分にも乱れがあるが、ここは英訳に従って訳を付けておく。(p. 919)

<sup>xxii</sup> vyāma 両腕を広げた長さ、1 fathom、約 6 feet。尺貫法での1尋(ひろ) = 6尺、すなわち約 1.816メートルとほぼ同じ。

<sup>xxiii</sup> テキストの解釈が難しい。'chāyāyāc chatrāvayam' を、英訳者は 'known by the name Cāyācatra (-kṣetra?)' とする。【Padoux : 103】には、他の箇所では取り上げられた1か所を除く50の女神の座 śakta-pīṭha の名が挙げられており、ここでは chāyāchatra と記されている。

<sup>xxiv</sup> テキストには paramārgataḥ の異読として parabhāgatā が示され、英訳者はそれに従って訳そうとしているが、'with the other (western?) end (or otherwise)' と、疑問を残したままにしている。(p. 920)

<sup>xxv</sup> 底本の dīrghesvaro (p. 920) を B 本の dīrghesvarī (p. 456) に修正。

<sup>xxvi</sup> 悪魔の名前。『デーヴィー・マーハートミヤ』第7章は、女神によるチャンダとムンダの討伐が語られる。【横地 : 181ff.】

<sup>xxvii</sup> リシ (ṛṣi、聖仙) は神々に近い存在で、devarṣi (神仙) brahmaṛṣi (梵仙) rājarṣi (王仙) など、出自によるランキングがあるなかで、デーヴァルシは高位の存在。

- <sup>xxxviii</sup> シャラバ (śarabha) は、鹿の一種、あるいは想像上の動物で、8脚で雪山に棲み、獅子や象より力強いと言われる。【Moniel-Williams: 1057】
- <sup>xxxix</sup> 底本の caṅdaghantā (p. 923) は、B本では candraghaṅtā (p. 457) になっている。また、英訳は 'caṅdaghantā, (candraghaṅtā?)' としているので、和訳もそれに従う。
- <sup>xxxv</sup> Vindhyaśinī は「ヴィンディヤ山に住む女神」で、ウツタル・プラデーシュ州のパナーラスとブラヤーグラージの間にある聖地で、51女神の座の一つである。
- <sup>xxxvi</sup> プリグの系統に連なる聖仙の一人。【Mani:76】
- <sup>xxxvii</sup> 聖音オーム (ॐ om) の形が説明されている。
- <sup>xxxviii</sup> ダルマ (法: 社会的・宗教的義務) の追求、アルタ (実利: 物質的な利益) の追求、カーマ (性愛: 享楽や優美さ) の追求、モークシャ (解脱) はヒンドゥー教における四大目的といわれる。
- <sup>xxxix</sup> シヴァ信徒が死後に赴く場所をシヴァローカ (śivaloka) という。ウパニシャッド聖典では、解脱した人が死後に赴く場所をブラフマローカ (brahmaloka) といったが、時代が下るにつれて、シヴァ信徒はシヴァローカ、ヴィシュヌ信徒はヴィシュヌローカ (viṣṇuloka) へ赴くという考えが表れた。シヴァローカやヴィシュヌローカは解脱した人だけでなく、輪廻の途中の人も一時的に留まる場所と考えられている。
- <sup>xxxv</sup> 138 詩節から最後の 145 詩節まで、カーマーキヤー女神の性質が賞賛されるが、この 138 と次の 139 詩節は文法的に性、格の使用が不分明なところが多々見受けられる。
- <sup>xxxvi</sup> 施無畏印 (abhayamudrā) と与願印 (varadamudrā) のことで、右手を施無畏印にし、左手を与願印にした施無畏与願印かと思われる。
- <sup>xxxvii</sup> akṣasūtra はルドラークシャ (rudrākṣa) の実で造られた数珠であろう。ルドラークシャ (ホルトノキ科 高木インドジュズノキ; ジュズボダイジュ *Elaeocarpus ganitrus*) は、シヴァ派の聖木【古賀: 1157】で、その実を乾燥させた核で造られた数珠は現在でも多くの人によって使われている。
- <sup>xxxviii</sup> 底本では 'kalpyantu trīnyaryatadam samyagaryam' (p. 459)、Text B では 'kalpyanta trīnyastadam samyagardham' (p. 927)、とテキストに混乱があり、文意不明。
- <sup>xxxix</sup> この詩節は英訳者が指摘しているように (p. 927footnote)、今までの文脈からはずれているようである。

## 《キーワード》

カーマーキヤー、カームルーパ、カーリカー・プラーナ、ヒンドゥー教、聖地